

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。

そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々

第一章 「弥陀の誓願不思議に」

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

誓願不思議

誓願不思議について寺川俊昭先生は、次のように教示されます。

この「不思議」については、誓願が、人間の思議・分別を超越したものであることを表しているとして一般に理解されている。しかし親鸞聖人の著作に親しむとき、これが単に本願の超越性を表す言葉ではなく、仏道を歩もうとする私たちの上に、本願のはたらきによって、如来の世界が開示されることが示されていると考えられる。

(東本願寺出版部『歎異抄』補注より)

つまり、人間の思議・分別を超越した「不思議なる誓願」がどこかにあるということではなく、本願が衆生の信心となって成就した事実が、「誓願不思議」だということでありましょう。

言い換えれば、罪悪深重・煩惱熾盛の我が身においては、「決して起こりようのない事実が起こった」ことへの謝念と讃嘆が「不思議」という言葉で表現されるのであります。私たちは、自力の妄念に立って「不思議な誓願のはたらき」を想定しようとしませんが、「誓願不思議」とは、どこまでも仏により言い当てられた、罪業深き自身への目覚めという呼応関係において領かれる事実のほかにはありません。

往生

寺川先生は次のように言われます。

往生については、一般に「未来往生」、つまり、往生を死後に実現するものと理解してきた伝統があり、『歎異抄』においても、肉体の命が終わる際に遂げるものとして語られてもいる。しかしながら、『歎異抄』の主眼が、自力の諸行を往生の行としないで、念仏こそ本願に裏付けられた往生の行であると確かめていることを思う (同前)

宗祖も、往生を死後往生的に語ることは全く皆無ではありません。しかし『恵信尼消息』

に「後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死いずべきみちをば、ただ一筋におおせられ候」と記されているように、宗祖は後世・後生の問題を「生死出ずべき道」として課題にされました。

人間は死の問題だけでなく、生でも死でも迷っています。むしろ、生と死を分断してとらえる虚妄分別によって迷い苦しんでいるというのが仏の知見でありましょう。その意味で生と死を分けて、死後だけを救うということ自体があり得ないのだという、「生死一如」の視点に立って往生の問題をとらえねばならないことを教えられることであります。

往生をばとぐる

「念仏もうさんとおもいたつころ」として信心が起こるとき、その人は如来の浄土を実感しながら、往生の道にたつこととなるのである (同前)

本願として展開される仏知見の世界を念仏の信において賜る、それが宗祖においての往生の積極的理解でありましょう。以前、そのことを「佳生とは如来と共にある人生」と教えて頂いたことです。如来の純粹感覚の世界に触れて現生を歩む、往生の具体的内実が願生浄土であると言われるゆえんがそこにあります。

しかし、それは、理想郷なる浄土へ歩み行くことではありません。どこまでも私たちの邪見が知らされ、自身の事実に戻り続ける歩みなのでしょう。如来と共にある人生とは、闇と共にある我が生への自覚と仏への懺悔にほかなりません。

念仏の信において、我が力にては絶対に下がらない頭が下がった、その事実を攝取不捨の利益というのであります。